

## 名古屋大学

---

Q：なぜ日本への留学を選んだのですか？

大学で日本語を専門に学んだので、日本への留学を選んだのはごく自然な流れでした。大学3年生になり半年を過ぎた頃に日本語能力試験1級に合格し、その後、その年から交換留学生として東京の私立大学に1年留学しました。「留学」と言うより、「遊学」と言った方が正しいです。それは2003年3月のことで、当時は北京の地下鉄がまだ3路線のみでした。初めて家を離れ、華やかな東京へ行った私はすぐに新鮮味に溢れた都会に魅了され、交換留学生は学業のプレッシャーがあまり大きくなかったのも、ほとんど遊んでばかりいました。1年という時間は瞬く間に過ぎ、もうすぐ帰国という時になって急に気づいたのです。この1年、私は日本の風土や人の心といった面をあまり知ろうとせず、専門知識も向上は見られません。国内の大学はあまり有名校ではなかったのも、日本に留まり研究生としてさらに研鑽を積むことが必要だと考えました。当時の目標はかなりはっきりしていて、必須条件は有名国立大学でした。

Q：なぜ名古屋大学を選んだのですか？どんな期待があったのですか？

交換留学生の時、私が選択したのは日本語教育研究会です。とても面白いと思ったので、大学院でも研究を続けたいと思いました。しかしこの専門課程が設けられている大学はもともと多くはなく、国立大学となるとさらに少なかったのです。私はかなりラッキーで名古屋大学と東京学芸大学の合格通知を手にしていました。東京学芸大学の知名度は名古屋大学に及びませんでしたが、かなりいい国立大学で、とくに教育専攻ではとても有名でした。当時は若く、遊び盛りで、華やかな東京を離れがたく、1年の東京生活で知り合った大学の恩師の意見が私の考えを変えました。現実には恩師の話がまちがっていなかったことを証明しています。第一に名古屋大学の社会的知名度と認知度は予想もできないほど高く、名古屋大学の学生となったことは、「出身」を重視する日本では一生恩恵を受けます。第二に名古屋大学の博士課程は非常に充実していて、私が選択した日本語教育専攻を含め、かなり多くの学生が修士・博士課程で学び続けていました。当時はまだ博士課程で勉強を継続するかどうかよく考えていませんでしたが、名古屋大学は少なくとも選択肢の1つでした。東京学芸大学には博士課程はなく、万が一今後、博士課程に進むなら新たに教官と学校を選ばなければなりません。第三に名古屋大学は世界に80か国の留学生が集まり、グローバルな視野の開拓に一役買っていました。第四にグローバル化レベルが極めて高い東京に比べ名古屋は伝統文化の色が濃く、日本への留学を選ぶ以上は、様々な角度から観察し理解すべきだと思ったのです。以上のことから、心では未練たらたらだったとしても、名古屋大学を選ぶことにしました。

Q：留学期間はいかがでしたか？何を体験しましたか？発見はありましたか？

名古屋大学に留学していた間、「名大生」という称号は私に無限の誇りを与えたと同時に私を無比の自律した人間へと変えました。名古屋大学の素晴らしい名声は無数の優秀な先輩方の努力によって得たものであり、そこにさらに華を添えることができなかつたとしても、せめて足を引っ張るようなことはしてはなりません。教官の能力は言うまでもないので、そのほかの福利について話しましょう。

校内アルバイトの機会に恵まれています。毎学期、大学側は本科生のためにTA またはTUTOR として優秀な研究生を募集しました。とりあえず報酬が校外のアルバイトに比べて高かったことは置いときましょう。単純にこれらの仕事はどこまでも面白いものでした。私は本科生の英語のTA や中国語のTUTOR をしたことがあります。私が教えた学生はそ

## 名古屋大学

の後、中国語コンテストで賞をとりました。教える中で友情が育まれ、この収穫の気持ちは人生において貴重な財産となっています。

校外活動のチャンスも豊富でした。名古屋国際センターはいつも名大から講師を招き、各小中学校に派遣し、本国の文化を紹介させていました。私もそのうちの1人で名古屋やその周辺のたくさんの学校へ赴き中国を宣伝しました。私は現場で日本の子供たちの目に中国がどう映るかを知りました。正しい理解もあれば誤解もありました。私が直接、子供たちとコミュニケーションした時、何を「中日交流の架け橋」と言うのかを深く理解しました。中日の架け橋は決してそれほど偉大でも遠くで耳にするものでもないのです。名古屋大学では誰にでもチャンスが与えられるものなのです。

Q：名古屋大学での留学経験は現在の仕事に何か影響を与えていますか？

名古屋大学での留学経験は仕事に影響を与えるだけでなく、私の人生そのものに深い影響を与えたと言っていいでしょう。様々な影響の中で、「つらいことや苦勞に耐える」ことは確実にそのうちの1つです。名古屋大学の研究室は24時間灯りが点いていて、何時であろうとどこであろうと、全ての人が寸秒を争っていました。その日暮らしは言うまでもなく、努力を続けられない人間は卒業できないのです。私はハーバードの学生がいかにか一生懸命勉強するかを書いたネットの書き込みを見たことがあります。アメリカの学生は毎日4杯のコーヒーを飲み苦勞して学ぶなどと書かれていましたが、名古屋大学での勉強も少しも楽ではなく、連日家に帰れない、毎日2、3時間程度しか睡眠がとれないということも日常茶飯事でした。今、就いているメディアの仕事も多くの人が、つらいと感じていますが、私に言わせれば名古屋大学の留学生活に比べればまだまだ幸せです。

このほか大きな収穫は「1人で考える」ことです。教官は永遠にあなたが何をすべきかを教えてはくれず、どのようにやるのかはもっと教えてくれません。全ては自分で考え、模索するのです。これはまさしく中国の学生が最も不得意なことでしょう。たとえ何もしなくても誰も何も言いませんが、卒業は望まないでください。私がとったある方法は必死で考え、必死で行動することでした。自ら教官とコミュニケーションを図り、積極的に問題を解決しました。「1人で考える」ことは記者として基本の素質であり、名古屋大学で土台を固めました。

幅広く固い人脈。私は当時の大学の恩師が私に「名大出身」であることは生涯恩恵を受けると教えてくれたことを卒業後に身をもって知りました。たとえ帰国した後であってもです。政界の要人や学者、どの分野にも関係なく、常に名大の先輩がいて、このことが私の取材業務に大いに役立っています。例えば今年の4月にノーベル賞を受賞した天野浩教授を取材しましたが、実は彼のスケジュールは大変厳しかったのです。ですが名古屋大学の後輩だと言うことを聞いて、忙しい中時間をさいて私の単独インタビューを受けてくれました。先輩方の無言の配慮と手助けに心から感動しました。ですから私は仕事の合間を縫って、名古屋大学北京同窓会の関連業務を行っています。私も名大生たちの緊密な関係の強化のために微力を尽くしたいのです。

Q：現在の日本留学に関する報道内容の出発点は何ですか？

私が在籍する『環球時報』は、主に時事・政治の報道がメインですが、日本への留学に関する記事を書いたことがあります。最近の特集でG30プロジェクトを紹介しました。多くの人がこの記事を読んでわざわざ私に問い合わせをしてきました。私の出発点はとてもシンプルです。日本での留学経験で得たことが非常に多かったのも、日本への留学がもっと多くの中国の学生の選択になってほしいと思います。日本留学に関連する記事を掲載す

## 名古屋大学

---

る直接的結果は情報のシェアであり、間接的結果は中日の民間交流をより深めることです。これは両国関係に発展と改善にとっても利点が多いです。日本留学から帰ってきた者の1人として、両国のコミュニケーションの架け橋を続けることは、当然引き受けるべき責任と義務なのです。